

みんなの語り 語りう民放史

題字 中川 順

制作著作 日本海テレビ(NKT)
プロデューズ担当 古川重樹



番組タイトル



筆者

序章

戦争によって人生を翻弄されたその数奇な運命はまさにドラマ以上に思えた。

ロシア人女性のクラウディアさんと日本人男性の蜂谷弥三郎さん、37年間ロシアで一緒に過ごした2人が最後に別れたのは1997年3月、シベリア鉄道のブレア駅だった。

太平洋戦争終了後、多くの日本人捕虜がシベリア奥地の捕虜収容所へ送られるときに通った駅である。

実は、弥三郎さんもスパイ容疑でシベリアの強制収容所へ送られ長年にわたって当局の監視下におかれていた。その弥三郎さんを守るで我が身を捨てるかのようにして守り続けたクラウディアさん、彼女が最後に下した決断は長年連れ添った弥三郎さんを家族が待つ日本に帰すことだった。

きっかけは再会シーン

「シベリアへ抑留されていた男性が50年ぶりに日本に帰国するという話を中学校時代の恩師から聞いたので取材してみたい！」制作部の河野信一郎ディレクターがニュ

ースデスク席にいた私の所へ相談にやって来たのがこの作品の始まりだった。

「50年ぶりの帰国とは……めったにない話題なのでリサーチするよう指示。その結果鳥取市内に住む蜂谷弥三郎さん(当時78歳)の妻の久子さん(当時80歳)が、夫の生存の報に喜び帰国を待ちわびていることがわかった。1997年3月25日に、いよいよ弥三郎さんが京都発の列車に乗ってJR鳥取駅へ到着することになった。

当日は、久子さんが自宅を出てJR鳥取駅のプラットフォームで列車が到着するのを待つところを河野ディレクターのカメラクルーが取材する段取りにしていた。

しかし、前日になってふっと思ひなおした。今、思えば直感的なひらめきだったような気がする。

「もう一台カメラを出そう！」追加したカメラは列車で故郷へ向かう弥三郎さんの姿を車内撮影するためだった。

結果的にこの映像がのちに大きな意味を持つとは思ひもなかった。

その日、デスク席で夕方のニュースの準備をしていたところ、取



夫の胸に50年ぶり鳥取駅での再会
(1997年3月25日)

材スタッフが興奮した面持ちで帰ってきた。「ものすごい映像が撮れました」、澤田一宏カメラマンの言葉に、デスク周りに居た多くの報道部員も集まって試写会となる。《特急列車で故郷へ向かう弥三郎さん、どこことなく落ち着かない様子だ。やがて、列車はJR鳥取駅の3番ホームに到着する。ホームでは妻の久子さんが待っている。カメラはアップで久子さんの顔をとらえている。突然久子さんの表情が輝く、その表情はまるで50年前に戻った一瞬だった。突然駆け出した久子さん、小柄な彼女が飛び込んだのは列車から降りたった懐かしい夫の大きな胸のなかだった、人目もばからずホームで抱

き合い涙する老夫婦》それが50年ぶりの再会シーンだった。

2台のカメラが映し出したその感動的な映像に、誰もがぐき付けとなり目頭が熱くなった、涙がこえきれなかった。



これまでニュースやドキュメンタリー取材でさまざまな映像を撮り見てきたが、これほど心ふるわす映像は初めてだった。

「この感動的なシーンの背景を探りたい」。さらにリサーチした結果、弥三郎さんは、ロシアで出会った一人の女性のおかげで心を癒され命を長らえられたことが解った。

《戦時中、弥三郎さんは家族3人(夫婦と娘)で今の北朝鮮の平壤で暮らしていた。間もなく引き揚

げという時、突然身に覚えのないスパイ容疑で旧ソ連軍に連行され、そのまま行方が分からなくなってしまう。妻と娘は何とか日本へ引き揚げる事が出来、弥三郎さんの帰りを待ち続けた…》

1回目のロシア取材「人の悲しみの上に」

「日本人男性を助けてくれたロシア人女性を知りたい」その思いはしだいに強くなった。

鳥取駅での感動的な再会の日から一年後の1998年3月、河野信一郎ディレクターと澤田一宏カメラマンの2人がロシア極東のアムール州プログレス村へ向かった。そこで出会ったのがロシア人女性クラウディア・レオニードブナさん(当時77歳)だった。

クラウディアさんが弥三郎さんと出会ったのは、弥三郎さんがスパイ容疑で逮捕され強制労働10年の判決を受けたシベリアの強制収容所から釈放された後で、モスクワ近くの保養地の食堂だった。これがきっかけで2人の交際が始まり、その後ハバロフスク近くのプログレス村で一緒に暮らすようになった。実は彼女も同じように無

実の罪で強制労働の辛い過去があったのだ。

弥三郎さん44歳、クラウディアさん41歳の時だった。しかし、弥三郎さんに対しては当局から執拗な取調べや監視の目が光っていた。釈放されてもスパイ容疑が晴れない異国人の弥三郎さんを、彼女は命がけで守り続けていたのだ。

ここで40年近い歳月が流れる。

1991年にソ連が崩壊し政治体制が変わった。そこで弥三郎さんは一枚のメモを知人に託し自分が無事であることを鳥取県気高町に住む妻の久子さんへ伝えた。

その知らせに、「生きとったですか!」と驚く久子さん。保健婦の資格を取って生計を立てていた久子さんは、夫の生存を信じ戸籍もそのままにして女手一つで一人娘を育て上げていたのだ。

日本にメモを送った弥三郎さんだが、最初のころは妻と娘に会うだけで充分だと思っていた。

ところが、弥三郎さんの故郷日本を思う気持ちを知ら尽くしていたクラウディアさんは日本への「永住帰国」を強く勧めたのだ。

私達はその真意を知りたかった。

彼女は取材班のインタビューにこう応える。

「私はそれぞれが一人だと考えていました。彼は、家族はもう生きていないと思っていたのです。」

ただ彼には妻や娘が日本で生きていたことがわかったのです。

それなのに彼を帰さないでひき止めることなんてできません。

私はこの別離を絶対に後悔はしていません、人の不幸の上に自分の幸せを築き上げることは出来ません。



クラウディア・レオニードブナ
(1998年3月)

心をこめてあなたたちの幸せを祈ります」。一瞬言葉を失う。

まるでドラマのセリフを聞いているかのようだった。

シベリアの寒村で独り暮らす老

女の一言は重く心に残った。

2回目のロシア取材「復権証の交付」

ドキュメンタリー制作への手ごたえを感じ取った取材スタッフは、その年の夏に再びクラウディアさんを訪ねた。そこで、思わぬ事態に遭遇する。



復権証書が河野ディレクターに渡される

スパイ容疑で捕えられていた弥三郎さんの当時の裁判記録を調べていた河野ディレクターに、ロシア極東軍区検事局の復権部長から弥三郎さんの無罪を証明する復権証書が手渡された。それは思いもしない出来事だった。

ロシアでは1990年以降、政治体制が変わったことで証拠もな

く有罪とされていた人たちに国として名誉回復の作業を進めていたのだ。当時、日本人で復権を果たした人はおよそ1500人、しかし、ほとんどの人がシベリアの地で亡くなっている。

ロシア民主化への時代の移り変わりを具体的に示す復権証書交付のシーンを撮影できたのはまさに奇跡だった。私はドキュメンタリーに必要な「時代を描く」という視点からも、それは取材スタッフの執念と時代を読み取る力によるものだと思っている。



復権証書

日本に帰った河野ディレクターから名誉回復の復権証書を受け取った弥三郎さんは自嘲気味にこうつぶやく。「俺の人生を戻してくれ、

でも、スパイでなかったからこれで死にされる、80歳近くになってお前は無実とは……」

一方、弥三郎さんの復権証書を知ったクラウディアさんは、「単なる紙切れでしかありません。ひどい体験でした。心痛む大変な人生でした。ドアをノックされるたびに、誰かがやってくるたびに怯える、恐怖の生活を送っていたのです」。インタビューにこう答えるものの、弥三郎さんが日本でこの復権証書を見て喜ぶ姿を想像してか、心から嬉しそうな笑顔を見せたのだった。



弥三郎の復権を喜ぶクラウディアさん

編集マンのこだわり

毎週日曜日の深夜に放送しているNTV系列のNNNドキュメン

トでの全国放送が決まった。幸い当時の菊池浩佑プロデューサの配慮で放送枠が50分の拡大枠(通常30分枠)をもらうことが出来た。30分ではとても伝えきれないと感じていたのでとても嬉しかった。

編集は私が懇意にしているNTVの長尾昌氏(故人)へお願いした。長尾氏は日本のテレビドキュメンタリーで初めてエミー賞を受賞した『明日をつかめ貴くん』貴くんの4745日(1975年放送)NTV池松俊雄ディレクター(一)を編集するなど数々の名作を手掛けた人だった。



長尾昌氏

しかし、この作品は長尾氏を悩ませる。

ロシアと日本の二つの舞台が次々と移り変わるため、それを映像で視聴者にどう理解してもらうかという事だった。編集はNTVで行っていたがこんな出来事があった。

「ロシアに住むクラウドディアさんから鳥取の弥三郎さんへシーンが移るにあたって数秒の映像が見当たらない、編集が半日ストップしている」。ワンカットの映像にこだ

わる職人からの連絡だった。

それからしばらくして、「鳥取の浜へ打ち寄せる日本海の波を撮影して送って欲しい」という電話があり、その映像はこの作品の前半部分で8秒ほど使っている。それは、弥三郎さんを日本に帰し一人で暮らしているクラウドディアさんの映像から日本海に面した鳥取県気高町で妻の久子さんと生活している弥三郎さんへ場面転換する間に挿入された。

「二人は日本海を隔ててそれぞれの国で暮らしている。一人ぼっちで暮らすクラウドディアさんの気持ちを鳥取の浜辺へ打ち寄せる白波に託してみた」さらに、長尾氏はこう続ける。

「人の心をどう映像化するかがこの作品には重要だ、それがワンカットの心象風景なんだ」

こうして難産の末に生まれた『クラウドディアからの手紙』は1998年11月29日(日) 24時15分〜25時10分にNNNドキュメントで全国放送することになる。

ドキュメンタリーが舞台化

放送後、ある地元紙がコラムでこう記していた。「この作品はソフ

ィア・ローレン主演の往年のイタリア映画の名作『ひまわり』を彷彿とさせる、しかし、ここで描かれている事実はフィクションを超えている」と。

番組の感想や再放送を望む手紙や声が相次ぎ、NNNドキュメントでの視聴率は日曜日の深夜という時間帯にもかかわらず、関西地区8・7%、関東地区6・9%でその年のNNNドキュメント年間最高視聴率を記録した。また、地方の時代映像祭大賞、NNNドキュメント年間最優秀賞、ギャラクシー賞優秀賞や民間放送連盟賞優秀賞など数多くの賞を受賞、さらに2006年「ホリプロ」、2009年には「東京芸術座」によって舞台公演された。

戦争の傷跡を背負いながら誠実に生きるクラウドディアさんと弥三郎さん、そして久子さん。波乱に満ちたそれぞれの人生と時代を超えた深いヒューマニズムに多くの視聴者が共感してくれたように思う。戦争は多くの命を奪い、人の運命をもてあそぶ。

ロシアのテレビ局が鳥取市へ

2005年4月、ロシアのテレ

ビ番組の取材スタッフが突然日本海テレビを訪ねてきた。

ロシアの国営放送の第1テレビと契約する番組制作会社のポグレブノイ・アレクセイ監督ら3人で、クラウドディアさんと弥三郎さんのことがロシアの新聞で取り上げられたのがきっかけのようだった。

3泊4日の日程で鳥取市で暮らす弥三郎さんの生活シーンなどを取材し、1時間番組で放送する予定で、取材に先立ってドキュメンタリーを制作・放送した日本海テレビの制作スタッフに是非会いたいというのが訪問の理由だった。私と河野ディレクターが応対し通訳の人を介して取材の意図などについて話をしている中で、アレクセイ監督がこう切り出した、「貴方たちが作ったドキュメンタリーを、今見せてほしい」。

一瞬戸惑ったが通訳者にこう答えた。「我々はロシア語版は作っていない、ナレーションも字幕も日本語なので、今、作品を観て理解できるのはクラウドディアさんらロシアの人が話す言葉だけだ。しかし、その返答は「監督はそれでも観たいと言っている」。

それから、我々とロシア人スタ

ツフが同じ部屋で一緒に50分の作品を観ることになった。

時おり通訳の人が場面を見ながら何かを説明しているようだった。

そして、番組が終わり最後のスタッフロールが消えた途端思いがけない反応に驚いた。監督やスタッフが立ちあがって大きな拍手と歓声を上げ我々に握手を求めているのだ。

通訳の男性も興奮した様子で、「素晴らしい作品でした、監督もスタッフもみんな感動しました。ありがとうございます」。

私が、「日本語が分らないのに番組が理解できたのか」と尋ねると、「言葉は分からなかった。しかし、丁寧な映像の流れで番組の主旨を充分理解することが出来た」。

私はこの時、言葉の壁を乗り越える「映像の普遍的な力」を強く感じた。

編集の長尾氏がこだわったワンカットの映像が持つ意味、つまり、人の心を映し出す映像に国境は無いのだ。

クラウディアからの手紙

ロシアと日本に別れても、クラウディアさんと弥三郎さんは毎週

のように手紙を出し合いお互いを励まし合っていた。次の一文は、1997年3月21日付のクラウディアさんからの手紙である。

《ときどき、思い出してください。プログレス村を：私たちは思いもよらない人生の出会いをしました。よく似た運命が私たちを引き寄せたのでした。私たちの人生は常に恐怖のもとで過ぎて行つたのです。いつさいの罪は戦争にあるのです。私は心からあなたを理解しております。たった生後一年余りで別れた娘さんやまだ若かった奥さんがいる祖国を恋しく思うあなたの心のうちを：みんなのことを毎日のように涙とともに思い出していましたね。》



ときどき思い出してくださいプログレス村を…

あなたは再び家族の愛に包まれて祖国にいるという嬉しい思いで、私は生きていきます。

私のことは心配しないで下さい。わたしは自分の祖国に残って生きていきます。私は子供の時代をたった一人で生きてきました。だから、忍耐強く、勇敢に生きてゆきます。涙をみせず、お別れしましょう。つらく悲しいことだけれど、これが私たちの運命なのです。》



弥三郎さん久子さん夫妻

クラウディアと久子の死

弥三郎さんとブレア駅で別れてから17年たった昨年の9月6日、クラウディアさんはプログレス村の自宅で94年の生涯を閉じた。とても穏やかな死だったそうである。また、久子さんは2007年に鳥取市内の自宅で弥三郎さんの腕

の中で息を引き取っていた。90歳だった。そして、96歳になった弥三郎さんは娘夫婦に見守られながら鳥取市で暮らしている

終章

私達がこの作品に込めた思いは、個々の幸せが戦争によって容赦なく打ち砕かれた三人の別離と再会の姿を通して、戦争がもたらす残酷さ、平和の尊さを静かに訴えることだった。そして、どんな困難な境遇にあつても懸命に生き抜き、でも、決して失わなかった「寛容」と「無限の愛」を知ってもらいたかった。

プログレス村のクラウディアさんの庭には毎年ひまわりが大輪の花を咲かせているという。それはクラウディアさんと弥三郎さんが丹精込めて育てた思い出の花だった。クラウディアさんが居なくなつて日本海テレビのスタッフがこの庭のひまわりを撮影する機会は永遠に無くなつてしまった。

「陽に向かって咲くひまわり」：この花を見るたびに、お互いが思いやり支え合いながら明るく生きようとした二人の姿と重ね合わせている。【資料提供日本海テレビ】